

団子さし

神村ふじを

早いものでまもなく1月が終わろうとしている。今年の雪には参った。12月半ばにいきなり大寒波が来て、重く湿った雪をこれでもかというほど置いていった。冬は雪が降るものと毎年覚悟はしているものの、初寒波からの大雪となり、心の準備もできていなかった。

その後、正月にかけても大雪となり、1月の3連休も大雪。1月21日現在で平年の2倍近くの積雪量となり、私の住んでいる左沢あてらさわで70cm、豪雪地帯として有名な温泉地大蔵村肘折ひじおりでは251cmと東北では青森の酸ヶ湯すかゆについて2番目となった。

温泉の露天風呂などから雪を眺める分には風情があつていいのだが、片付けることを考えると、風情どころの話ではなくなる。

9人もいた母の兄妹はもう2人しかいなくなつてしまつたが、今でも神奈川で暮らしている。その叔父叔母は、「雪が降るのが嫌で嫌で暖かいところに出てきたんだよ」と事あるごとに言う。

屋敷田畑が少なく、また兄妹が多かった時代、郷里を離れて独り立ちしなければ生きていけなかった叔父叔母世代の人たちは、今も多くが都会で暮らしている。

正月は我が国最大の行事であり、歳神を迎える儀式という意味合いが強く、これを大正月と呼ぶのに対して、小正月は後の正月とも呼ばれ、農耕に關する行事が多かつた。すなわち、団子さし、雪中田植、成木責め、お柴灯さいとうなどである。ここでは今も細々と続けられている団子さしの行事について記してみたい。

勤務先の教育委員会のそばに旧斎藤半助家住宅がある。青苧あおぞ商い（展景No.98「北前船がもたらしたものの」で詳述）で財をなした大庄屋であつたが、時代の趨勢には勝てず山間の十郎畑という集落から挙家離村した。町では昭和53年に斎藤半助家住宅の寄贈



(写真提供：山形県大江町)

を受け、現在地に移築し保存している。

その住宅に、写真のように小正月の行事として団子木を飾っている。

年が明けた正月13日が団子木市である。この日、近在の人たち（在郷衆）が山から伐ってきた団子木（ミズキ）を売りに、町の中心部の店の前を借りて露店（だいどみせ^{*}）を開いていた。子どもたちは団子木などそっちのけで、綿飴やおもちゃの露店に群がっていたのだが……。在郷衆は夕方、その売り上げで小正月に必要な品々を買い求めて帰っていった。

団子木はミズキ。ミズキは「水木」と書き、文字通り力強く水を吸うので、その勢いにあやかりたいことと、冬場に多い火事の火伏せの意味があったように聞く。

団子さしは、ミズキの枝々に団子をさしたものを座敷に飾る行事で、かつては小正月の中心をなす催しであった。団子木の枝元を昆布で包み巾着餅を下げる。枝のところどころに鮎を形どった煎餅や大判小判、千両箱、宝船などの縁起物を吊るした。団子は繭玉を表し、養蚕の繁栄と五穀豊穡を願った。

小学校1、2年生で生活科という学習をしている。これは従来の理科と社会科を合わせたような教科で、小学校低学年という発達段階に応じて、自分たちの身近な生活に焦点を当てながら学習をしている。その中で伝統行事にも目を向けて、今の時期団子木を飾る学校もある。

ある学校では、子どもたちの手作りの鮎煎餅や大判小判に混じって、子どもたちの願いが書き込

んである短冊が飾られていた。短冊の中には、

「みんないつまでも友だちでいられますように」

「おじいちゃんが百さいすぎてもずっと元気でいますように」

「りっぱな3年生になりたいです」

商売をしている家の子は、

「五こくほうじょう しょうばいはんじょう けんこうになりますように」

と、2年生なりに家のことを気にかけて書いている。

ある女の子はこんなふうに認めた^{した}。

「にっぽんのみんながしあわせになりますように」

大人の話を敏感に聴き取ったのだろう。コロナ、不景気、環境問題の付きまとう暮らしの中で、子どもたちを悩ませている先の見えない不安な世の中、大人社会の責任は大きい。

^{*}だいどみせ——大道店。大道商^{あみな}いの店。（『日本国語大辞典』小学館より）

市（おまつ）が開かれた際、町の中心部の大きな道に露店を建てたので、「だいどみせ」と呼ばれていた。調べている途中、ヒキガエルのように少し大きめの蛙のことを「だいどびつき」といったことを思い出し、えっ、この「だいど」って「大道」。書いている途中で混乱してしまった。大道芸という言葉もあるのでもう少し研究が必要^{*}である。